あの夏、僕らは。

暁　京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの夏、僕らは。

【Ｎコード】
Ｎ８２３０Ａ

【作者名】
暁　京

【あらすじ】
もう二度とは戻れない、あの満ち足りていた日々。

一年三百六十五日。
喧嘩をせえへん日なんて数えるほどしかなかった。
そやのにいつのまにか、あんたはうちの背をこして、そしたらあたしが蹴っても叩いても、手を出さへんくなった。

「姉ちゃん相手に殴ってもしゃーないし」

ぶっきらぼうな口調で。
うん、そやね。
阿呆な姉ちゃんでごめんな。

いつのまにか靴のサイズも体重も、手のひらの大きさも足の太さも。
抜かれてた。
三つも年下で小学生やったあんたに身長越されたときは、どないしよかと思ってんけど。

「次はコッペリアでスワニルダ役になってん！」

意気揚揚と、あたしは習っていたバレエで初めてもらった大役を報告した。
一年に一度の発表会は、あんたとおとんとおかんとおねえ、皆で見に来てくれたから。
おとんがビデオカメラ回して。
おかんがあたしのどぎつい舞台メイク見て吹き出して。
おねえが手振ってあたしの名前を呼んで。
あんたは途中で寝こけていっつも幕切れ位で起き出して。

ずっとそれが続くような気ぃしてたわ。
ほんま阿呆やね。
永遠なんて、どこにもないんは知ってたはずやのに。

「あ、ごめん。俺その日試合やわ」

あの頃から、あたしらは少しずつ仲良くなってったな。
変な話やけど、喧嘩もだんだん減って。
テレビのリモコン争いはせんようになって、同じもんを一緒に見て。
あたしがなかなか開けらへんジャムの蓋を、あんたは軽々開けれるようになって。

「ホームラン打った！」

「トウ・シューズもろた！」

道は少しずつ分かれて、そして二度とは重ならへんかった。
家族で出掛ける日はなくなっていった。

「結婚するから」

始めに家族という確かなようで薄い、やわらかな殻を破ったのはおねえやった。
ドラマみたいに泣いて反対するおとんとおかん。

「子供おるんよ」

それが決定打。
真っ白なおねえのウエディングドレス見ながら。

あぁもうすぐあたしらはばらばらになるんや。
何故かあたしは確信してた。

「大学、家出るわ。遠いし。でも月一位なら帰って来れんねん」

あたしはいつのまにか高三になって、阿呆みたいに中間期末のテストのみを頑張った甲斐あって、早々と夏休みに大学はほぼ確定してた。

「あ、ごめん。俺も家出んねん。野球部の寮入るわ」

あんたまだ中三やんか。
喉まで出とった言葉を飲み下すんは、結構大変やった。
じゃああたしが戻って来ても、二段ベッドの下にあんたが腹出して寝てる事はもうないんか。
風呂の順番でジャンケンする事もなくなるんか。

嘘やろ。

「じゃあ後一緒に暮らせるんも半年ないなぁ」

出て来た言葉は結構冷静やったけど。
おとんとおかんのがむしろ、涙ぐんどったけど。
まだ半年あんのに。
……もう半年しかないんか。

「遊ぼか、ひさびさに」

数年ぶりに帰ったばあちゃんちの、緑の日本海で泳いだ。
水しぶきで涙はわからへんかったと思う。

最後の夏休み。
あたしとあんたの。

「甲子園出たら見に来てや」

砂浜っていうよりは、岩でごつごつした場所に座ってあんたはぼそっと言った。
二人で捕まえたクラゲを、岩にのせて溶かす、昔からの遊びをしながら。

「負けたらしばくで」

あんたはぽかんとして、それから坊主頭をかいて笑った。

「姉貴にしばかれても痛ないわ」

いつのまに姉貴って呼ぶようになったん？
あたしは笑った。
とうの昔に辞めたバレエの先生の顔が何故か、頭に浮かんだ。

「またやろかな」

何を？とはあんたは聞かんかった。

そしてあたしは大学進学と共に一人暮らしをする事を決め、
あんたは私立の野球部強豪校への進学を決めた。

今年の夏は、いつもよりたくさん甲子園を見た。
おとんとおかんとあたしとあんた。
嫁に行ったお姉と旦那まで家呼んで。

このメンツも来年の三月までか。

「あの人らがあんたの先輩になんねんなぁ」

まぶしい白球を追いかけてる、あんたが行く学校の、野球部員達の顔を見ながら。

「姉ちゃん、ほんま見に来てや」

姉ちゃんなんか姉貴なんか統一しいや。

阿呆やなぁ。

うん、大丈夫。

また家族引き連れて行ったるから。

心置きなく投げて打って走っとき。

あたしは離れても、あんたのお姉ちゃんやから。

何があってもそれだけは変わらへんよ。

（後書き）

去年の今ごろ書いた作品です。たった一人の弟に。――健太。明日は二回戦やね♪約束どおり応援行くから待っててや？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8230a/

あの夏、僕らは。

2010年10月29日06時30分発行